大学院研究年報　第50号　2021年２月

中古早期の有標型新兼語式について

髙　柳　浩　平*

要　　旨

本稿では、上古期から中古早期にかけての有標型新兼語式（V１＋O＋使／令＋V２/A）を論じた。同形式は、漢代以前に先んじて使役義を表していた「使」を紐帯として、因果関係を持つ複文が縮約したことによって生じたが、そのV２/Aに用いられたのは熟類（純粋な自動詞・形容詞）が主であったことを明らかにした。中古早期に至ると、V２/Aには熟類に加えて破類（自動・使動に両用された動詞）も用いられるようになるなど、構文としての生産性が大幅に増していたことが分かった。これまで同形式は説明文体的な性格の強い農書、医書などを中心に見られるとされていたことから、口語性の強いとされる漢訳仏典に対象を広げて調査すると、同形式が文体を問わず広く用いられていたことが確認できた。また、同形式と比較されることの多い新兼語式（V１＋O＋V２）との間で意味上の区別は見出せず、いずれも等しく直接使役を表していた。まとめとして、有標型新兼語式は「不足した使役義を補う」ために生じたのではなく、使役構文の類型が増していく過程で、有標型の形式として意味や機能の過不足なく発展して広く用いられた直接使役構文の１つであったと結論付けた。

目　　次

０　はじめに
Ⅰ　有標型新兼語式の形成過程
Ⅱ　中古早期の有標型新兼語式
Ⅲ　有標型新兼語式と動補構造説
Ⅳ　有標型新兼語式の発展
Ⅴ　おわりに

０　はじめに

漢語史における中古早期[1]には、下例（１）（２）の如く、原因動作を表す語（V１）[2]とその結果状態を表す語（V２/A）の間に目的語（O）が置かれた直接使役構文である新兼語式（V１＋O＋V２/A）が広く用いられていた[3]。その一方で、例（３）（４）の如く、新兼語式中のV２/Aの直前に使役動詞「使／令」が挿入された「V１＋O＋使／令＋V２/A」形式も併存して用いられていたとされる。同例中の「使／令」は、「O（刀、瓮）をV２/A（利、熱）が表すところの結果状態に至らしめる」ということ（＝使役義）を表している。

（１）　今當打汝前兩齒折。（『賢愚經』巻十一）[4]
（今まさにお前の両前歯を打ち折るべし。）

（２）　在於樹下，風吹枝折，墮其脊上。（『百喩経』巻三）
（［野干が］木の下にいて、風が枝を吹き折り、その背中に落ちてきた。）

（３）　乃於樓上得一磨石，磨刀令利，來下而剥。

＊　たかやなぎ　こうへい　　文学研究科中国言語文化専攻博士課程後期課程
2020年10月15日　査読審査終了

（『百喩経』巻一）
（そこで上の階で研ぎ石を得て、刀を磨いて鋭利にさせ、降りてきて剝がした。）

（４） 冬即蒸瓮使熱，穰茹之。（『齊民要術・笨麹并酒第六十六』）
（冬は甕を蒸して熱くさせて、稲の茎を之でゆでる。）

本稿では、例（３）（４）の如き形式には使役動詞「使／令」が置かれていることを考慮して、これを新兼語式と区別するため、便宜上、「有標型新兼語式（Ｖ１＋Ｏ＋使／令＋Ｖ２/A）」と呼ぶこととする[5]。同形式は上古期から近代まで長きに亘って見られるが、新兼語式を扱った先行研究においても、有標型新兼語式にまで考察が及ぶことは多くない。このような有標型の使役構文がなぜ生じたのか、新兼語式などと比較して如何なる機能があったのかを確かめることは、中古早期の使役構文の類型をまとめるうえでも有益であると考える。

また、古屋（1985：51-52）や江蓋生（1996：７）は、「Ｖ教（O）C」「Ｖ使C」などの形式（本稿で言う有標型新兼語式）を当時の南方方言中において流行した形式としているが、梁銀峰（2006：252）は『碧岩録』『斉民要術』『仏本行集経』『敦煌変文』などの、中古期の比較的北方にあたる地域で成立したとされる文献中にも頻繁に見られることから、「此种格式似乎又没有地域的限制（この種の形式には地域的な制限もなかったようである）」と指摘している。有標型新兼語式が、方言的な用法として南方地域に限定されたものではなく、地域を限らず広い範囲で用いられていたことを窺わせる。

以上の点を踏まえたうえで、本稿では実際に上古期から中古早期の出土文献及び伝世文献から有標型新兼語式を調査する。そのうえで、同形式が上古期に如何にして形成されたのかをまとめ、構文として発展を遂げた中古早期に如何にして用いられたのかを明らかにしていくことで、有標型新兼語式を直接使役構文の類型中へと位置付けることを試みたい。

Ⅰ　有標型新兼語式の形成過程

魏培泉（2000：840-841）、梁銀峰（2006：176）、刘子瑜（2008：83）によれば、有標型新兼語式は、最も早くは戦国晩期頃の成立とされる中国最古の医書『五十二病方』中に出現していたと説く。以下（５）（６）（７）にその用例を示す[6]。なお、例（８）（９）は目的語が省略された有標型新兼語式（Ｖ１＋使／令＋Ｖ２/A）である。

（５） 先善以水灑，而炙蛇膏令消，敷。（『五十二病方・加痂』）
（先に水でよく洗って、蛇の油を火で炙り溶かして、つける。）

（６） 漬，炙之令溫。（『五十二病方・頽』）
（［下着を］浸したら、これを火にかざして温かくする。）

（７） 熬蠶種令黄，磨取蠶種，冶。（『五十二病方・頽』）
（蚕の繭を煮て黄色くさせ、蚕の繭をすり取り、潰す。）

（８） 取薺孰乾實，熬令焦黑。（『五十二病方・諸傷』）
（よく乾燥したナズナの実をとって、黒焦げになるまで炒る。）

（９） 浚取其汁，以蜜和令纔甘。（『五十二病方・人病馬不癎』）
（その汁をさらいとって、蜜で和えてわずかに甘くさせる。）

興味深いのは、下例（10）（11）の如く同一書中において無標の新兼語式も出現しているということである。前後の文脈を考慮しても、意味の上では有標型新兼語式とほとんど区別なく用いられていることが分かる[7]。両形式の成立時期に明確な

前後関係があったとは判断し難いが、いずれも既に先秦には用いられていたことは確かであろう。

（10）　煎之沸，即以布足之。（『五十二病方・傷痙』）
（これを煮て沸かし，布で貼り付ける。）

（11）　燔飯焦，冶，以久膏和敷。（『五十二病方・身疕』）
（飯を炊いて焦がし、砕いて、古い動物油で混ぜてつける。）

一方で、『五十二病方』が成立した当時、下例（12）の如く目的語の字数が多かったり、例（13）の如く目的語に量詞が含まれたりした場合には、「使 / 令」の直前でポーズが置かれ、単文ではなく複文と見なし得る状況もあったとされる。これは上古期において、各々の述語の独立性が高かったということであろう。後述するように、動作行為とその結果状態を単文中にて同時に表現できる直接使役構文は上古期に複数種形成されていったが、有標型新兼語式も含めて皆一様に未熟な段階にあったとされることから、使役構文の類型的に考えても、有標型新兼語式は存在したが、なお未発達であったと判断できよう。

（12）　燔所穿地，令之乾。（『五十二病方・朐養』）
（穿った穴に火を焚いて乾燥させる。）

（13）　熬陵（菱）一參，令黄，以淳酒半鬥煮之。（『五十二病方・乾瘙』）
（菱三分の一を煮て、黄色くさせ、味の濃い酒半斗でこれを煮る。）

このように単文と複文の境界が曖昧であった状況について梁銀峰（2006：176）は「两可的情况由于都符合语法习惯，又不会引起意义的差别（意义等值），两者是可以互相转化的。（どちらでもよいという状況は文法習慣に適していたために、意味の違いを引き起こす可能性もなかった〔意味等値〕、両者は互いに転化することができた。）」と解釈する。筆者も梁銀峰 2006に同意したうえで、有標型新兼語式は前節（使役事象）と後節（被使役事象）で因果関係を持つ複文が、使役動詞「使 / 令」を紐帯として単文に縮約する形で有標型新兼語式が生じたとしておく。では、単文へと縮約していった根源的な要因は何だろうか。当時の使役構文の総体的趨勢を見ると、単音節の使動用法（V ＋ O）では表し得なかった動作行為（手段）を単文中で同時に表現できるようになったことで使成式（V ＋ C ＋ O）が形成されたり、使役義を突出し始めた「使」構文が、動作行為（手段）を単文中で同時に表現するために「使」が一般動詞に置き換えられて新兼語式（V１＋ O ＋ V２）が成立したりするなど、直接使役構文の類型が増しつつあった。つまり、上古期の使役構文の類型的な変化（単文中で動作行為と結果状態を同時に表現できるようになること）に応じる形で、有標型新兼語式も複文から単文へと縮約していったと考えられよう。以下、形成過程を図示しておく。

V１＋ O，使 / 令＋ V２ /A
→　V１＋ O ＋使 / 令＋ V２ /A

ここで問題となる点が２つある。まず、上図の「使」に注目されたい[8]。有標型新兼語式において使役動詞「使」は極めて抽象的な使役義を表しており、「V２ /Aが表す結果状態に至らしめる」ことを表している。しかし、李佐丰 1989 の調査では、春秋頃の成立である『左伝』中に「使」構文（使＋ O ＋ V２ /A）は1170例出現して、下例（14）（15）の如く派遣・命令義（O を派遣して / に命令して V させる）を表す例が約1100例出現して93％以上を占めていたが、例（16）の如く使役義（O を V２ /A の結果状態に至らしめる）を表す例は70例ほどで、７％に満たなかったとされる。一方、陈国华（2016：63-66）の調査によると、時代を経て

後漢の成立である『論衡』中では、「使」構文が337例出現して、内148例が下例（17）（18）の如く使役義を表しており、総数の約43％を占めている。

（14）　晉侯使賈華伐屈。（『左伝・僖公六年』）
（晉侯は賈華を派遣して屈を討伐させた。）
（15）　定王使王孫滿勞楚子（『左伝・宣公三年』）
（定王は王孫満に命じて楚子を労わせた。）
（16）　何故使吾水滋？（『左伝・哀公八年』）
（どうして私の水田を汚すのか？）
（17）　此言孔子之德，能使水卻，不湍其墓也。（『論衡・書虚』）
（これは孔子の徳が、水を逆流させ、その墓にぶつからぬようにさせたことを言う。）
（18）　怒而觸不周之山，使天柱折，地維絶。（『論衡・談天』）
（［共工は］怒って不周山にぶつかり、天柱を折って、地維を折ってしまった。）

「使」が上古期において、具体的な派遣・命令義を表す実義性の強い動詞から、抽象的な使役義を表す使役動詞へと文法化（grammaticalization）を進めていったことは定説となっているが、後漢に至っても、同一文献内（『論衡』）における使役義用法は４割程度に留まっている。それにもかかわらず、漢代以前の成立である『五十二病方』では抽象的な使役義のみを表す「使」を用いた有標型新兼語式が頻出しているのである。

もう１つの問題は、「使」と組み合わされたＶ２/Ａの性質である。漢代以前の「使」構文のＶ２/Ａに用いられるのは、派遣・命令義という「使」の意味からも想像に難くないように、動作性の極めて高い動詞（朝、伐、攻、殺、射など）や、自動・使動に両用された動詞（破、折、絶、敗など：以降「破類」と呼ぶ）がほとんどで、使動用法を持たない純粋な自動詞・形容詞（熟、死、乾、焦など：以降「熟類」と呼ぶ）が用いられることは稀であった[9]。しかし、有標型新兼語式においては、複文の後節にあった段階（或いは単文へと縮約しつつあった段階）で、既にＶ２/Ａに熟類が用いられている。筆者が『五十二病方』を調査しても、Ｖ２/Ａに用いられていたのは主に熟類（熟、黄、焦、沸、温など）と見なせる語であった。

以上の２つの問題点を考慮すると、「使」を巡って有標型新兼語式と「使」構文の状況が矛盾しているようにも思える。先行研究においてこの矛盾に言及した論は見当たらないが、今仮にこれに合理的な解釈をしておくとすれば、有標型新兼語式は、出土文献に出現する以前の、より早い時期（戦国以前）において既に口語中に用いられていたということであろう。つまり、派遣・命令義から文法化した使役義の「使」が、主要な形式である「使」構文に先んじて有標型新兼語式中には頻繁に用いられていたということになる。ある語彙が文法化する場合、一般的にまず言語の使用場面（典型的には会話）によって臨時的な意味がもたらされる。Bybee 1994も指摘するように、文法化した用法がある特定の構文的環境下で頻繁に用いられるということは、文法化の初期的段階において普遍的に見られる現象である。

時代を経て、漢代の有標型新兼語式について胡敕瑞（2005：222）は「这种有标记形式的出现是因为“VOC”中的Ｃ不少是来自本可表使动用法的动词，汉代由于这类动词的“动作”意义（即致使意义）渐趋消亡而只剩“性状”意义，添加“使/令”标记可以唤起它的原义（この種のマーカーの置かれた形式［訳者注：有標型新兼語式を指す］が出現したのは、“VOC”中のＣの多くが元々は使動用法を表現できる動詞で、漢代にこの種の動詞の“動作”義（即ち使役義）が次第に消滅して“状態”義のみが残ったが、“使/令”マーカーを加えることでその原義を呼び起こすことが出来たためである」と推測し、Ｖ２/Ａには使動用法が衰退しつつあった破類が用いられていたと指摘するが、

これは上古期の言語事実に即しているとは言い難い[10]。

前述の通り、実際に『五十二病方』中の有標型新兼語式を調査した限りでは、そのV2/Aに用いられていたのは熟類（熟、黄、焦、沸、温など）で、破類は見当たらない。有標型新兼語式が出土文献中に出現した当初から、V2/Aに用いられていたのは熟類が主であったことを考えれば、元々存在することのなかった使役義を「喚起（呼び起こす）」ために「使/令」が加えられて有標型新兼語式が形成されたとするのは、些か不自然ではないだろうか。実際に後漢に訳出された複数の漢訳仏典を調査してみると、以下のような用例が見られる[11]。なお、例（20）は目的語が省略された形式であり、前代までに引き続いて散見される。

（19）　佛以神力，斷水令住。（『中本起經』巻上）
（仏は神力でもって、水を断ち留めさせた。）

（20）　二者常拭令淨（『大比丘三千威儀』巻下）
（二つ目として［仏像を］常に拭って綺麗にする。）

（21）　一者當持淨巾拭中外令淨（『大比丘三千威儀』巻下）
（一つ目として清潔な布切れで内と外を拭って綺麗にするべし。）

（22）　三者五易水令淨。（『大比丘三千威儀』巻下）
（三つ目として五回水を取り替えて綺麗にする。）

（23）　一者皆當三易水使淨。（『大比丘三千威儀』巻下）
（一つ目として三回水を取り替えて綺麗にするべし。）

（24）　五者掃塔前六歩使淨。（『大比丘三千威儀』巻下）
（五つ目として塔の前六歩分を掃いて綺麗にする。）

胡敕瑞（2005：222）は、後漢の有標型新兼語式のV2/Aには主に破類が用いられていたと主張するが、上例の如く後漢の用例を調べても、明確にV2/Aに破類が用いられている例は見当たらなかった。検出されたいずれの用例においても、V2/Aに用いられているのは「住」「淨」のみであるため、本稿で断定することは控えるが、漢代頃においても有標型新兼語式のV2/Aには主に熟類が用いられたのは確かだと言えるのではないだろうか。そもそも、上古漢語の状況を考えると、熟類の場合にはその前方に内項（internal argument）を置く語順が整合的であって、破類の場合にはその後方に内項を置くという語順が整合的であった。これを有標型新兼語式中のV2/Aに置換して考えると、常にV2/Aの前方に内項が置かれており、V2/Aの後方に内項が置かれるという形式は見られないのである。語彙的特徴から言っても、構文的特徴から言っても、V2/Aに熟類が広く用いられて破類が用いられなかったことは、有標型新兼語式にとってごく自然な成り行きであったと言える[12]。

Ⅱ　中古早期の有標型新兼語式

梁银峰（2006：181）は、「在隋唐以前尤其是魏晋南北朝时期，“Vt 1 ＋使役动词＋ Vi 2 ”格式已经相当普遍地运用（隋唐以前の特に魏晋南北朝期には，“Vt 1 ＋使役动词＋ Vi 2 ”形式［訳者注：有標型新兼語式を指す］が既に相当に普遍的に運用されていた）」と述べて、中古早期に至って有標型新兼語式がより一層生産的に用いられるようになったとまとめている。近年では、牛順心（2014：105）もこれと同様の見解を示している。実際、古屋（2000：282）が北魏の成立である中国最古の農書『斉民要術』[13]を網羅的に調査すると、有標型新兼語式は下例（25）（26）（27）に示す如く342例が出現していた。同一文献中において、ここまで多くの用例が検出されることは、上古期と比較して用例数自体も大幅に増加していることが推察さ

れよう。なお、例（28）（29）は目的語が省略された形式である。

（25） 坑内近地鑿壁為孔，插枝於孔中，還築孔使堅。（『斉民要術・種桃柰第三十四』）
（底近くの坑壁に鑿で穴をあけ、葡萄の枝を穴に挿し、さらに穴を築き固めておく。）

（26） 耕地令熟，耬耩作垅。（『斉民要術・種桑柘第四十五』）
（地を耕して肥やし、〔種をまく〕農具で種をまいて畝を作る。）

（27） 著麻油，炒蔥令熟，以和肉醬，甜美異常也。（『斉民要術・作醬法第七十』）
（胡麻油を付け、葱を炒め熟させ、肉醬と和えると、非常に甘美である。）

（28） 鐵齒杷耬之令熟，足踏使堅平。（『斉民要術・種葵第十七』）
（鉄の歯の杷で畑を耕して肥やし、足で踏んで固くさせる。）

（29） 小麥三鬥炊令熟，著甕中，以布密封其口。（『斉民要術・作酢法第七十一』）
（小麦三斗を炊きあげ、甕の中に入れて、布でその口を密閉する。）

古屋（2000：279）は調査の結果から、『斉民要術』中の新兼語式と有標型新兼語式の例を比較したうえで「こう並べてみる限り、また文脈を考えた場合ですら、両者の間に意味上の違いを見出すのは困難である。」と指摘する。上古期に続き中古早期に至っても、有標型新兼語式は無標の新兼語式と同様の意味を持ち区別なく用いられていたことが窺えよう。

しかし、中古早期の有標型新兼語式に関する先行研究（古屋 2000、魏培泉 2000、梁银峰 2006、曹晋 2011など）を見る限り、文中に引かれる用例は『斉民要術』中のものがほとんどである。こういった状況からか、有標型新兼語式を「特別常見於技術手冊或說明書的這類文體中（特に技術書や説明書といった類の文体によく見られる）魏培泉 2000：845」と考える向きもあるが、実際に中古早期の文献を調査してみると、口語性が強いとされる漢訳仏典にも頻出している。個々の文献に現れる用例数自体は少ない感が否めないが、多数の文献に出現していることは、中古早期において有標型新兼語式が文体を問わず広く普遍的に用いられていたことを窺わせる。以下、中古早期に訳出された漢訳仏典中の用例を示す。

（30） 取彼罪人，嚼之令破。（『正法念處經』巻十）
（その罪人を取りだして、之［罪人］を噛んで砕いてしまった。）

（31） 不應打死人令破取衣。（『四分律』巻五十五）
（死人を打ち剝いで衣類を取ってはいけない。）

（32） 如取種子磨之令破。（『隨相論』巻一）
（種を取り出して擦り破ってしまうようなものだ。）

（33） 著水著米，煮令沸。（『四分律』巻四十三）
（水をつけ米をつけて、煮て沸かす。）

（34） 以熱鐵繩絣之使直。（『長阿含經』巻十九）
（熱した鉄縄で之を縛って真っ直ぐにさせる。）

（35） 依八聖道，推之令去，斬之令斷。（『大般涅槃經』巻二十）
（［菩薩は］八聖道に従って、之を推し去らせ、之を斬り断った。）

（36） 乃於樓上得一磨石，磨刀令利，來下而剝。（『百喩經』巻一）
（そこで上の階で研ぎ石を得て、刀を磨いて鋭利にさせ、降りてきて剝がした。）

（37） 蹋地令堅，其麥不生。（『百喩經』巻四）
（地を踏んで固くして、その麦が生えないようにしてしまった。）

（38） 不令鳥獸飲之令盡。（『大悲經』巻三）

（鳥獣に之を飲み尽くさせることはしない。）

(39)　三火應斷令滅。（『雑阿含經』巻四）
（三毒の火は断って滅するべきである。）

(40)　先啄其脈，飲血令盡。（『正法念處經』巻十一）
（まずその血脈を啄んで、血を飲み尽くした。）

(41)　牽著鑊中煮之令爛。（『佛説佛名經』巻三十）
（鼎の中に引き入れて之を煮て爛れさせた。）

(42)　我取香水注火令滅。（『大般涅槃經』巻下）
（私は香水を取って火に注ぎ滅した。）

(43)　用稻谷麩，水浸令熟。（『百喩經』巻二）
（稲の藁を砕いたものを用いて、水で浸して腐らせる。）

(44)　取其戲丸塗以毒藥，曝之使乾。（『長阿含經』巻七）
（其の戯丸を取ると毒薬を塗って、之を晒して乾かした。）

上例にて注目すべきは、V２/Aに熟類（沸、利、堅、爛、熟、直、乾）に加えて、中古早期において出現頻度の高かったとされる破類（破、断、滅、盡）の語が頻繁に用いられていることである[14]。前述の通り、上古期までの同形式のV２/Aには主に熟類が用いられていたが、中古早期に至って、用いることの出来る語の類型が大幅に増しており、熟類と破類のいずれも等しく受け入れるようになるなど、有標型の直接使役構文として生産性を高めている様相が窺える。また、このような発展は有標型新兼語式だけに見られるわけではなく、新兼語式や「使」構文も中古早期にかけてV２/Aに用いられる語の類型が大幅に増していった（高柳2019、2020）。３種の分離型の使役構文は足並みを揃えて発展していったのである。

他、漢訳仏典を除けば劉宋の成立である説話集『世説新語』にも以下の１例が見られた。

(45)　晏乃畫地令方，自處其中。（『世説新語・夙惠』）
（晏はそこで地面に四角く線を引き、その中に自分の身を置いた。）

Ⅲ　有標型新兼語式と動補構造説

胡敕瑞（2005：222）は、有標型新兼語式が中古早期にかけて盛行したことを認めながらも、「“VO使/令C”可以説是“VOC”的一种有标记的形式（“VO使/令C”は“VOC”の一種の有標型の形式であると言える）」と指摘する。胡敕瑞 2005のように、無標の新兼語式（V１＋O＋V２）を、目的語が動詞（V）と補語（C）によって隔てられた分離型の動補構造（V＋O＋C）と見なす説（梅祖麟 1991、石毓智・李讷 2001、蒋绍愚 2003、胡敕瑞 2005など）は根強いが、その立場から有標型新兼語式をも「有標の」分離型の動補構造と見なしているのである。動補構造説の考え方では、VOC中のCに元々用いられた語（破類）に文法化が生じて、使役義を失っていく（補語に転化していく）過程で、その使役義を再起させるためにCの直前に「使/令」が用いられたということになるが、既に第１章にて指摘した通り、そもそも有標型新兼語式が形成された当初のV２/Aに用いられていたのは専ら熟類であった。更に、中古早期の状況を見ても、同形式を動補構造と見なし難い状況が頻繁に出現している。古屋（2000：282）による『斉民要術』の調査では、有標型新兼語式のV２/Aに副詞的成分が前置された例が下例（46）（47）（48）（49）を含む55例出現している。

(46)　預銼麴，曝之令極燥。（『斉民要術・法酒第六十七』）
（あらかじめ麹を削り取って、これを陽に曝して極めて乾燥させる。）

(47)　以杷平豆令漸薄，厚一尺五寸許。（『斉民

要術・作豉法第七十二』）
（熊手で豆を平らにしてだんだんと薄くさせて、厚さは一尺五寸とする。）

（48） 反覆日曝令極乾，然後高櫥上積之。（『斉民要術・笨麹並酒第六十六』）
（ひっくり返して日に曝して極めて乾燥させ、その後高い棚にこれを積んでおく。）

（49） 然後細剉，令如棗、栗。曝使極乾。（『斉民要術・造神麹並酒第六十四』）
（その後細かく切り、ナツメや栗のようにさせる。日に曝して極めて乾燥させる。）

また、筆者が中古早期の漢訳仏典を調査してみると、有標型新兼語式のＶ２/Ａに副詞的成分が前置された用例は、以下（50）（51）（52）（53）に示す如く散見される。

（50） 譬如鐵丸燒令極熱。（『雜阿含經』巻十一）
（鉄球を焼いて極めて熱くさせるようなものだ。）

（51） 以火燒金，鍛令極薄。（『中阿含經』巻四十二）
（火で金を焼き、鍛えて極めて薄くさせる。）

（52） 作七鐵丸，燒令極赤。（『賢愚經』巻三）
（七つの鉄丸を作ると、焼いて極めて赤くさせた。）

（53） 熱白鑞汁，煮令極熟。（『正法念處經』巻七）
（熱い錫汁で、煮て極めてくたくたにさせる。）

上例の如く、Ｖ２/Ａの直前に副詞的成分（漸，極）が置かれた用例が散見されることを考慮すれば、Ｖ２/ＡはＶ１を補足説明する補語的成分（C）ではなく、上古期と同様に独立した動詞・形容詞と見るべきであろう。ちなみに、梁银峰（2006：174）は有標型新兼語式を「特殊使役句式（特殊使役構文）」と呼び、後に刘子瑜（2008：72）もこれを「使役意义的连谓结构（使役義の連述構造）」と定義している。両者の取る呼称の背景に共通しているのは、いずれもＶ２/Ａを補語的成分（C）とは捉えずに、なお独立した動詞（或いは独立可能な動詞）と捉えていることである。筆者も、中古早期の有標型新兼語式のＶ２/Ａの直前に副詞的成分が置かれる例が散見されることなどを踏まえ、これを動補構造とする立場はとらない。

また、胡敕瑞（2005：222）や石毓智・李讷（2001：66）といった動補構造説を採る学者が一様に主張するように、有標型新兼語式中において「使/令」は補語をマークする「标记（マーカー）」と呼べるほどまで文法化が進んでいたのかという点にも疑問が残る。梁银峰（2006：181）は「使役动词的词汇意义还很明显，并未虚化为纯粹的语法成分（使役動詞の語彙的意味は依然明確であり、まだ純粋な文法成分へと虚詞化していたわけではなかった）」と述べて、「使/令」はＶ１とＶ２/Ａの因果を強調する使役動詞であったと説く。刘子瑜（2008：86）も、同形式中の「使/令」について「格式中“使/令/教”的实词义很都十分明显，是使役动词（形式中の“使/令/教”の実義はいずれも十分にはっきりとしており、使役動詞である）」と述べ、依然、使役動詞の範疇を出ていないことを指摘している。刘子瑜 2008の言うところの「实词义（実義）」は前後の文脈を見る限り「使役義」を指しているようだが、筆者も両者に同意したうえで、有標型新兼語式中の「使/令」は文法化を進めていたけれども、文法化の極にある「マーカー」には至っておらず、依然として「ＯをＶ２/Ａが表すところの結果状態に至らしめる」ということを表す使役動詞に留まっていたと見ておく。

Ⅳ　有標型新兼語式の発展

中古早期には、下図に示す如く有標型新兼語式に構文としての発展が見られ、下例（54）（55）

（56）の如く「使 / 令」が目的語に前置された形式が僅かながら見られるようになる[15]。

V1 + O + 使 / 令 + V2 /A
→　V1 + 使 / 令 + O + V2 /A

（54）　合飯一時内甕中，和攪令飯散。（『斉民要術・白醪麹第六十五』）
（飯を合わせてしばらく甕の中に入れて、飯をかき混ぜて散らす。）

（55）　刀子摘令血出，色必黒。（『斉民要術・養牛馬驢騾第五十六』）
（小刀で血を摘まみ出させると、色は必ず黒い。）

（56）　如渾，椎令骨碎。（『斉民要術・炙法第八十』）
（丸ごと［の時と同様］のように、骨を突き砕く。）

古屋（2000：282）の調査では『斉民要術』中にはこの発展形式が 9 例出現しているが、筆者が同時期の複数の漢訳仏典を調べると同形式は検出されなかった。しかし、有標型新兼語式の後代における発展を見ると、上図に示した発展形式の語順が多数を占めることになっていく。また、これと同時に語彙レベルでは、下例（57）（58）の如く宋代にかけて使役動詞が「使 / 令」から「教 / 交 / 叫」へと拡張していくという発展も見られる[16]。

（57）　與你醫教手好。（『張協狀元・第四十五出』）
（あなたのために手を治して良くしてあげましょう。）

（58）　如一条死蛇，弄教他活。（『朱子語類・朱子十八』）
（一匹の死んだ蛇がいて、それを生き返らせるようなものだ。）

なぜこのような語順変化が生じたのかを論じた先行研究は見当たらないため、ひとまずその要因を次のように推察する。上古期の複文「V1 + O，使 / 令 + V2 /A」が縮約したことで有標型新兼語式（V1 + O + 使 / 令 + V2 /A）が形成されたが、時代を経て中古早期において十分に一構文として熟した段階に至ると、内在する「使 / 令」自体が「使」構文として整合性のある語順（使 + O + V）へと変化することを要求したために、後代に至って、「V1 + 使 / 令 + O + V2 /A」形式へと変化していったのではないか。以下、仮説を簡潔に図示しておく。

複文「V1 + O，使 / 令 + V2 /A」から
単文「V1 + O + 使 / 令 + V2 /A」へと縮約
↓
常用されて「V1 + O + 使 / 令 + V2 /A」が
構文として定着
↓
形式内部の「使 / 令」が「使」構文本来の語順
（使 + O + V）へと回帰
「V1 + O + 使 / 令 + V2 /A」
⇒「V1 + 使 / 令 + O + V2 /A」

また、汪维辉（2000：192）、张美兰（2006：100）によれば、使役動詞「教」は「使 / 令」に遅れて文法化を遂げたとされる。実際に中古早期の文献として『世説新語』を調査してみると、下例（59）の如く使役義を表す用例も見られるが、単体（教 + O + V）での使用頻度は「使 / 令」より極めて少なく、有標型新兼語式中に用いられることもなかった。

（59）　公教人噉一口也，復何疑？（『世説新語・捷悟』）
（公は人々に一口ずつ食べさせようとしています、また何の疑いがあるのか？）

その後、単体での使用頻度も増していく中古晩期に至って、「教」は本来の整合的な語順（教＋O＋V）を保持したまま「V１＋教／交＋O＋V２/A」の如く、有標型新兼語式中に極めてスムーズに入り込むような形で用いられていくようになったと考えられよう。

V　おわりに

以上、本稿では上古期から中古早期にかけての有標型新兼語式の形成と発展を論じてきた。まず、漢代以前に前節と後節が因果関係を持つ複文「V１＋O、使／令＋V２/A」が縮約して有標型新兼語式（V１＋O＋使／令＋V２/）が成立したとする立場を採った。そのうえで「使」の性質に注目すると、「使」構文（使＋O＋V２）中では派遣・命令義（Oを派遣してV２させる／Oに命令してV２させる）を表していた一方、有標型新兼語式中では使役義（OをV２/Aという結果状態に至らしめる）を表していた。更にV２/Aの性質にも注目すると、「使」構文では主に破類が用いられていたが、有標型新兼語式では熟類が主であった。これら２つの性質の差異を考慮して、有標型新兼語式には、文法化した使役義の「使」が先んじて用いられていたと主張した。漢代でも、複数の漢訳仏典において有標型新兼語式が散見されたものの、そのV２/Aに用いられているのは依然として熟類が主であった。

中古早期に至って、有標型新兼語式の用例数は大幅に増加しており、構文として着実に発展していたことが明らかとなった。但し、先行研究中において用例として挙げられているものの多くは農書『斉民要術』中の用例であったことから、実際に調査をしてみると、多数の漢訳仏典中にも類に富んだ用例が見られたことから、当時、文体を問わず生産的に用いられていた使役構文の１つであったことが窺えた。更に、調査結果を語彙的に見ると、V２/Aには熟類に加えて破類も広く用いられるようになっており、上古期からの発展が見られた。また、有標型新兼語式のV２/Aを補語（C）と捉えて動補構造と見なす向きもあるが、本稿の調査でも明らかになった通り、V２/Aの直前には副詞的成分が置かれることもあったことを考慮すれば、中古早期においても動詞の連続する構文であったことは間違いないだろう。

これまで高柳 2019、2020にて「使」構文、新兼語式（V１＋O＋V２）といった分離型の使役構文を論じてきたが、本稿での有標型新兼語式も加えてまとめると、いずれも上古期に形成され、形成当初はV２/Aに用いられる語の類型に限りがあったものの、中古早期に至って語の類型が増していき、用例数も大幅に増えていったという全く同様の経路を辿ってきたことになる。分離型の使役構文は、中古早期においてなお未発達であった複合型の使役構文を補うような形で、広く普遍的に用いられていたと言えるだろう。

最後に、中古早期までの有標型新兼語式の類型的位置付けをまとめると、表層にある使役動詞「使/令」が紐帯となって有標型新兼語式中のV１とV２/Aの因果関係を強めていたことは明らかであり、それ以外には無標の新兼語式と意味上の差異はないように思える。改めて引けば、「こう並べてみる限り、また文脈を考えた場合ですら、両者の間に意味上の違いを見出すのは困難である。」とした古屋（2000：279）の指摘はまことに合理的であって、中古早期までの分離型の使役構文は、いずれも等しく直接使役を表していたと言えるだろう。有標型新兼語式は漢語の使役構文の類型が増していく最中に形成されたが、決して「形式中に不足した使役義を補う」ために生じたのではなく、有標型の使役構文の一形式として意味や機能の過不足なく着実に発展し、中古早期には生産的に用いられていたと考えられよう。

注

1）　時代区分は、五胡乱華（３世紀頃）以前を「上古期」、以降宋代（12世紀頃）までを「中古期」、宋代

以降から五四運動までを「近代」、五四運動以降を「現代」とした王力 1958の説を採る。なお、本稿で言う「中古早期」とは魏晋南北朝期を指す。

2）　便宜上、用語を簡略して次の如くアルファベットで示す部分がある。S：主語、V：動詞、O：目的語、C：補語、A：形容詞、N：名詞、の通りである。

3）　新兼語式という呼称は、同形式が上古期の兼語式（使／令＋O＋V）に淵源を持つ可能性があることに鑑みて命名された（宋绍年 1994：42）。後に梁银峰（2001：354）は「所谓“新兼语式”就是主要动词不是由使令类动词充当，而是一般行为动词充当所构成的兼语式。……新兼语式则表示施事主语的动作施及或影响到受事宾语后产生的结果或状态。（いわゆる“新兼語式”とは主要動詞が使役類動詞によって担われず、一般行為動詞によって担われ構成された兼語式のことである。……新兼語式は施事主語の動作が受事目的語に到達し、影響を与えた後に生じた結果或いは状態を表す。）」と定義している。

4）　本稿で引く全ての用例は，全て稿末に付した紙本の漢籍にて照合した。

5）　筆者が「V１＋O＋使／令＋V２/A」形式を有標型新兼語式と呼ぶのは、新兼語式（V１＋O＋V２）との形式上の類似から「有標型」という文言を加えたに過ぎず、形成経路においても、用法においても、新兼語式との関連を主張するものではないことに留意されたい。

6）　大西（2009：24）は「秦汉出土医药文献中的使令动词多数用“令”，较少用“使”（秦漢の出土医薬文献中の使令動詞の多くは“令”が用いられて、やや少なく“使”が用いられている）」と指摘する。『五十二病方』中においても主に「令」が用いられている。

7）　髙柳 2020では、新兼語式の使役義は「V１＋O＋V２/A」という構文自体が担っているという説を提起した。一方で、本稿で論じている有標型新兼語式は「使」が構文としての使役義を表出していることは明らかである。両形式には「無標」と「有標」という形式の差異があるにもかかわらず、無標の新兼語式が意味上の区別なく有標型新兼語式と同様に使役義を表出していることは、却って漢語における無標形式の使役義の強さを再確認できよう。

8）　ここでは紙幅の都合上「使」のみを取り上げるが，基本的に「使」と「令」は意味的に等価であったとされる。「使／令」の文法化を探った马贝加（2014：717）は「由于源词语义，句法的一致性，“令”与“使”发生了平行语法化。（根源たる語の語義と文法の一致性から，“令”と“使”は並行して文法化が発生した。）」と指摘している。梁银峰（2006：179）も、使役動詞「使／令」に意味の差異はなく、等しく使役義を表していたと説く。

9）　破類、熟類という分類は、説明の便宜上区別するものであるが、李佐丰 1994、宋亚云 2014が上古期から中古早期の文献を調査した結果から、その正当性が確かめられている。

10）　胡敕瑞 2005は有標型新兼語式に用いられているV２/AをC（補語）と見なしている。筆者はこれに同意せず第３章にて批判的に検討するため、ここでは立ち入らないでおく。

11）　魏培泉（2000：832）は「大體而言，佛經較常用「令」，其他古籍較常用「使」。（大体のところ、仏典では「令」がやや常用されて、その他の古籍ではやや「使」が常用されている。）」と指摘している。上古期から中古早期に至るまで長くこの傾向が見られる。

12）　筆者の素朴な感覚として、基本的に、上古期から中古早期の分離型の使役構文（新兼語式、有標型新兼語式）のV２/Aには主に熟類が用いられて、複合型の使役構文（使成式）のV２/Aには破類が用いられていたと予測している。別稿にて論じたい。

13）　古屋（2000：282）は、「當時の口語に近い書面語で書かれているからこそ今の我々には讀みにくいという面もあるのではないだろうか」と述べて、総じて『斉民要術』の口語性は強かったと推察するが、筆者も、漢訳仏典中の調査結果を踏まえてこれに賛同する。

14）　中古早期において、破類の語として「破」「断」「滅」「盡」の出現頻度が高かったことは、宋亚云 2014の調査によって確かめられている。

15）　上古期にも「使／令」が目的語に前置された形式は例（12）の如く僅かながら見られるが、いずれも目的語が「使／令」の前後に重複して置かれている形式（「V１＋O＋使／令＋O＋V２/A」）であるため、本章で論じている発展形式とは異なることに留意されたい。

16）　紙幅の都合上、本稿では中古早期以降に使用頻度の高かった（梁银峰 2006：252）とされる「教」のみを取り上げる。特に「交／叫」は南方方言的な文体中に見られるという。

〈用例出典〉
『百喩經』1924（『大正新脩大蔵経』第四巻本縁部）
『百喩經譯註』2006 北京圖書館出版社
『長阿含經』1924（『大正新脩大蔵経』第一巻阿含部）
『春秋左傳注』1981 中華書局
『大般涅槃經』1924（『大正新脩大蔵経』第十二巻涅槃部）
『大悲經』1924（『大正新脩大蔵経』第十二巻涅槃部）
『大比丘三千威儀』1924（『大正新脩大蔵経』第三巻本縁部）
『佛説佛名經』1924（『大正新脩大蔵経』第十四巻經集部）
『論衡註釋』1979 中華書局
『馬王堆出土文献訳注叢書 五十二病方』2007 東方書店
『斉民要術校釋』1982 中国農業出版社
『史記』1975 中華書局
『世説新語箋疏』（修订本）1993 上海古籍出版社
『四分律』1924（『大正新脩大蔵経』第二十二巻律部）
『隨相論』1924（『大正新脩大蔵経』第三十二巻論集部）
『賢愚經』1924（『大正新脩大蔵経』第四巻本縁部）
『雑阿含経』1924（『大正新脩大蔵経』第二巻阿含部）
『戰國策注釋』1990 中華書局
『温州文献丛书 张协状元校释』2006 上海社会科学院出版社
『正法念處經』1924（『大正新脩大蔵経』第十七巻密集部）
『中阿含經』1924（『大正新脩大蔵経』第一巻阿含部）
『中本起經』1924（『大正新脩大蔵経』第四巻本縁部）
『朱子全書』2002 上海古籍出版社

参考文献

Bybee, Joan: Perkins, Revere & Pagliuca, William 1994『*The evolution of grammar Tense, aspect and modality in the languages of the world*』University of Chicago Press.
曹晋 2011「“使令句”从上古汉语到中古汉语的变化」『语言科学』第55期 pp. 602–617
陈国华 2016「汉语分析型致使结构在中古的发展—以《论衡》“使”字句为中心」『语言本体研究』pp. 63–66
大西克也 2009「上古汉语“使”字使役句的语法化过程」『何乐士纪念文集』语文出版社 pp. 11–28
高柳浩平 2019「中古早期の「使」構文について」『人文研紀要』第92号 pp. 227–265
——— 2020「中古早期の新兼語式について」『人文研紀要』第95号 pp. 283–319
古屋昭弘 1985「宋代の動補構造“V 教（O）C”について」『中国文学研究』第11号 pp. 40–57
——— 2000「斉民要術に見る使成フレーズ Vt ＋ 令 ＋ Vi」『日本中国学会報』第五十二集 pp. 268–284
胡敕瑞 2005「动结式的早期形式及其判定标准」『中国语文』第三期 pp. 214–225
江蓝生 1996「游仙窟漫笔」『开篇』VOL.14 好文出版 pp. 1–8
蒋绍愚 2003「魏晋南北朝的“述宾补”式述补结构」『国学研究』第十二卷 pp. 367–404
李佐丰 1989「《左传》的使字句」『语文研究』第二期 pp. 29–34
——— 1994「先秦的不及物动词和及物动词」『中国语文』第四期 pp. 287–295
梁银峰 2001「先秦汉语的新兼语式兼论结果补语的起源」『中国语文』第四期 pp. 354–363
——— 2006『汉语动补结构的产生与演变』学林出版社
刘子瑜 2005「汉语动结式述补结构的历史发展」『语言学论丛』第三十辑 pp. 188–264
——— 2008『《朱子语类》述补结构研究』上海古籍出版社
马贝加 2014『汉语动词语法化』下册 中华书局
梅祖麟 1991「从汉代的“动，杀”“动，死”来看动补结构的发展」『语言学论丛』第十六辑 pp. 112–136
牛順心 2014『汉语中致使范畴的结构类型研究兼汉藏—语中致使结构的比较研究』南開大学出版社
石毓智・李讷 2001『汉语语法化的历程—形态句法发展的动因和机制』北京大学出版社
宋绍年 1994「汉语结果补语式的起源再探讨」『古汉语研究』第二期 pp. 42–46
宋亚云 2014『汉语作格动词的历史演变研究』北京大学出版社
王力 1958『汉语史稿』中冊（修订本）科学出版社
魏培泉 2000「說中古漢語的使成結構」『歴史語言研究所集刊』第七十一本第四分 pp. 807–856
汪维辉 2000『东汉—隋常用词演变研究』南京大学出版社
小方伴子 2002「先秦・両漢の使動用法と使令兼語式」『中国語学』249号 pp. 1–19
张美兰 2006「近代汉语使役动词及其相关的句法、语义结构」『清华大学学报』哲学社会科学版 pp. 96–115